

# 名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2024年9月16日

学部・学科名 現代国際学部国際教養学科

担当教員氏名 城月 雅大

1. プログラム名称	地域研究・国際研修プログラム（イタリア研修）
2. 渡航先国名	イタリア
3. 派遣期間	2024年8月30日（金）～2024年9月12日（木） 14日間
4. 派遣先教育機関名	サッサリ大学
5. 参加学生数	5名
6. 派遣目的	言語力の向上と、プロジェクトベースの学習による地域再生に関する専門的知識を獲得するため。
7. 派遣内容	<p>イタリア・サルディーニャ島で建設が予定されている重力波観測装置について、その建設が地域の観光産業、産業構造、住民の生活に与える影響について、フィールドワーク及び集中講義を通じて学習した上で、その解決策についてプロジェクトベースでアウトプット制作、最終プレゼンテーションでは、ヌオロ市長、報道関係者、参加者に対して各グループが成果を報告した。この様子は、地元新聞社の2紙、テレビ局でも報道された。</p> <p><b>フィールドワーク</b></p> <p>学生は現地でのフィールドワークを通じ、地域の観光施設や再生プロジェクトの現場を訪問した。特に、イタリアの地方都市では、伝統的な建築や文化が観光資源として活用されている点が強調され、地域再生のための具体的な手法を学んだ。</p> <p><b>地域住民との交流</b></p> <p>プログラムの一環として、地域住民や現地企業との対話</p>

	<p>やワークショップが行われた。住民の視点を取り入れた地域再生の取り組みを実際に体感し、地域住民との協力がどのようにプロジェクトの成功に寄与するかを理解した。</p>
8. 成果	<p>また、フィールドワーク先のヌオロ市においては、市長からの招待を受けて、学生が地域の伝統行事に参加することも出来た。</p> <p>研修最後の3日間は、ローマ市内及びヴァチカン市国において美術館、歴史的建造物の視察を行った。</p>
9. 備考	

以上

## 1・研修中に学習した講義内容と大学での学びとの関連性について

研修中に学習した講義内容と大学での学びとの関連性については、研修の講義内容での経験の視点とレクチャー内容の視点から記述したいと思う。

研修は主に、英語で行われるレクチャーとアウトプットを目的としたディスカッション&ワークショップで構成されており、経験面では、英語で情報をインプットし、自身の考えを英語としてアウトプットするという点が国際教養学科の授業である LAGSE 科目と強く関連性があると感じた。また、普段は社会学ゼミに所属し、指定文献を読み、問いと批判的検討を立てることを実践しているが、この一連の思考プロセスが、ワークショップとして、Fundamental Question for the ET project（ET プロジェクトに対する根本的な質問）の設定を行う際に、非常に役立ち、この点においても大学での学びとの関連性を見出すことができた。

レクチャーの内容面に関しては、多岐にわたる分野の話があったが、大学での学びととりわけ関連性を感じたのは、ツーリズムの弊害に関するレクチャーである。レクチャー内では、美術館を例に、美術館のような場所は、一度人が訪れたとしても、同様の人が再訪し得るのは何十年も先、もしくは一度の来訪で満足してしまうことが指摘された。町の活性化のためには、観光人口よりも、住民を増やしていくことが重要であると述べ、ツーリズムに批判的なまなざしを向けていた。ツーリズム論の授業を大学で受講した際に、オーバーツーリズムを代表とするツーリズムの弊害について学び、日本が推進しようとしているインバウンド政策に懐疑的なまなざしを持つこと実践したことから、この点においても関連性を感じた。

## 2・研修期間を通して努力したことと、その結果得られたもの

私は本研修への参加を、自身の大学生生活の学びの集大成として位置づけており、自分が持つ知識や、これまでの学習経験を通して身につけた力を、統合し、一つの力として発揮することを努力した。

私はこれまでの大学生活で、英語でのコミュニケーション力、異文化への適応力、他者との共創力を自分なりに磨いてきた。英語コミュニケーション力に関しては、大学授業で積極的にアウトプット型の授業を履修し、自身の意見を英語で伝えることができるように努めた。異文化への適応力は、北海道のニセコという多国籍な労働者がいる環境に飛び込み、住み込みでアルバイトに従事した。他者との共創力は、ゼミにおける発表をはじめ、プレゼンテーションで数人の意見を統合しまとめる場数を踏むことで身につけた。

今回、英語でのプレゼンテーションを多国籍なチームの中でまとめる作業にあたり、これまで、ばらばらに身につけてきたこれらの力を統合して発揮する必要があった。はじめは、点と点で身につけた力がうまくつながらず、「日本語でならうまくまとめられるのに…」と取り組む際にネガティブな感情にさいなまれることが多かったが、時間をかけて積極的に実践していくことで、徐々に点と点の力がうまく線上に繋がっていった。この経験を通して、自身の成長をリアルタイムで実感することができたとともに、異文化の中で英語を使いプレゼンテーションを行うことに新たな楽しさを見つけることができ、新たな観点からの学ぶ楽しさについても実感することができた。私は、来年度からは社会人として働くが、今回の経験を通して、自分が人生のどんなタイミングにいたとしても、新たな「挑戦」をしていきたいと思った。

## 1. 研修中に学習した講義内容と大学での学びとの関連性について

私はまちづくりやツーリズムに興味があり、レクリエーション系の授業を多く履修していたため、大学で学んだ内容と関連性の高い講義がいくつかありました。例えば、サルディーニャ島で進行する少子高齢化と人口減少に伴う空き家問題に対し、人を呼び戻し、空き家を再利用する方法についての講義がありました。また、ETプロジェクトの実施を通じて、それを科学的な観光資源として活用することでどのような利点があるのかについても学びました。空き家を再生する際に生じる課題や、科学的施設を観光資源として活用する際の可能性については、これまで考えたことがなく、新たな視点を得ることができました。さらに、地域開発を進める上で必要な意思決定の方法についても学びました。地域を開発するためには、住民、地方行政、企業など多様な関係者との合意形成が不可欠であり、そのために必要なコミュニケーションの方法や利害関係を整理する手法を学ぶことができました。これらの内容は、大学で学んだ多角的視点を活かす機会となり、地域開発における批判的思考を養うための貴重な講義でした。

## 2. 研修期間を通して努力したことと、その結果得られたもの

研修期間を通して、私は毎日少なくとも一度は自分の意見を伝えることを目標に努力しました。特にグループワークでは、イタリア人の学生2人と同じグループになり、当初は英語力が十分でなかったため、話の半分程度しか理解できず、自分の考えをうまく表現できないことに苦労しました。しかし、研修に参加している以上、自分の意見を伝えなければ意味がないと感じ、ホテルに戻ってからその日の話し合いを復習し、翌日のグループワークで伝えたい意見を前もって準備するようになりました。その結果、自分の意見を伝えることができ、グループのメンバーが真剣に耳を傾けてくれたとき、自信がつき、話し合いにも積極的に参加できるようになりました。自分の意見がグループ内で採用されたときは特に嬉しく、さらなるモチベーションにつながりました。この経験を通じて、英語力が十分でなくてもコミュニケーションを諦めず、自分の考えを伝える努力を続けることが重要であると強く感じました。これが相手に対して自分も真剣に考えているという意思表示になり、関係構築に役立ったと実感しました。

## 2024年度地域研究・国際研修プログラム（イタリア）

### 帰国後レポート

#### 現地での言語使用経験

現地では、学生同士や先生との会話は基本的に英語で行いました。生徒や先生のバックグラウンドは、日本人やイタリア人などさまざまでしたが、共通言語である「英語」を使ってコミュニケーションをとりました。母語やバックグラウンドが異なるため、意思疎通が難しい場面もありましたが、お互いに思いやりを持ちながら行動していたと感じました。専門的な説明をするときには、分かりやすい表現で繰り返し説明してくれたり、写真などを用いて教えてくれることもありました。日本とイタリアという異なる文化背景の中で、自分の考えを英語を通して伝え、共有できたことは非常に嬉しく感じました。また、学生同士も専門分野が異なるため、新しい視野や考え方を学び、大いに刺激を受けました。

#### 外大での座学の学びがどのように活用されたのか、また補完されたのか

大学では、まちづくりや観光関連の授業を履修していたため、事前知識を持って授業に臨むことができました。これにより、現地での授業内容もスムーズに理解できました。普段、社会学や観光学などの幅広い分野の学習を行っているため、現地の講義内容と大学での学びが点と点でつながり、新しい知見を得ることができました。また、現地でのフィールドワークでは、以前集中講義で半田市のフィールドワークに参加した経験が役立ち、さまざまな視点から地域を見ることができました。観光・環境・まちづくり・社会学・ガバナンスなどの多角的な視点で物事を考える力を培うことができ、現地の学生との交流を通じて、都市開発や建築学に関する貴重な学びも得られました。

#### 地域社会や文化について学んだこと

サルディーニャ島で生活をして、島民の島に対する強い愛情を感じました。どの島民と話しても、会話の中から島に対する誇りが伝わってきました。日本では、自分の県や市について聞かれても、はっきりと答えられない人が多いと感じますが、サルディーニャの人々は「ここに有名な〇〇がある」「この場所は訪れる価値がある」といったように、自分たちの地域についてよく理解しており、それが地域への愛着の表れだと思いました。また、飲食店では

全く知らない夫婦同士が隣のテーブルで楽しく会話しながら食事をしていた光景が印象的でした。イタリア人は、食事やコーヒブレイクの場でのコミュニケーションを大切にしており、そこから新たなコミュニティが生まれ、社会的な結束が強まっていると感じました。

## 異文化理解の深まり

現地で生活をして、イタリア人は自分の意見をしっかりと相手に伝える姿勢が強いと感じました。日本人の学生は、自分も含め、間違いを恐れて発言しないことが多いのに対し、イタリア人の生徒や先生は、感じたことや考えたことがあれば授業中でも積極的に発言していました。特に印象に残ったのは、ルーラ市の市長で、市長は自分の意見をしっかりと主張し、話を遮ることなく最後まで発言していました。そうしたイタリア人の中で生活する中で、自分ももっと積極的に意見を言う必要性を強く感じました。この経験を通して、自己主張の大切さと、自分の意見をしっかりと相手に伝えることの重要性を学びました。

## 理論と実践の融合

今回のイタリア研修では、フィールドワークと授業が密接に連携しており、実践的な学びを得ることができました。ETプロジェクトの予定地やサルディーニャ島の歴史的建造物を実際に見学することで、授業で学んだ内容が現実のものとして感じられました。「授業で学んだことがこの地域でどう活かされるのか」「この地域の住民はどう感じているのだろう」といった疑問を現地で考えることができ、理論と実践が強く結びついた学びとなりました。

## 振り返りと学び：自己評価と今後の展望

今回のイタリア研修を通して、新しい自分と出会い、大きく成長できたと感じています。これまで大きな挑戦を恐れがちだった自分を変えたくて、この研修に参加しました。英語力や海外経験に不安を感じながらも、授業前には予習をし、現地の学生にも質問するなど積極的に行動しました。フィールドワークでも先生や地元の人々に積極的に質問し、学びを深めました。途中、自分の意見を伝えられず悔しい思いをしたことがありましたが、それを機に質問することを恐れず、自分の考えを積極的に発言できるようになりました。この経験を通して、自分は大きく変わり、学業面でも精神面でも成長したと感じています。

今後は、この研修で得た経験を活かし、愛知県や名古屋のまちづくりや観光に貢献していきたいと考えています。すぐに形にすることは難しいかもしれませんが、観光に携わる仕事を通じて愛知県・名古屋の魅力をさらに高め、「日本一の好かれる都市」「行きたい街ナンバーワン」にすることを目指しています。そして、人々に「幸せ」を提供できる人材になりたいと考えています。